7　　娘の心親知らず 　文法　連用形接続の助動詞②

都にわびしき女房侍りけり。かなしく思ふ娘一人持ち給へⓐり。①いかなる人にも見せたくは思ひしかども、しかるべきたよりもなかりけり。せめてこの女子をいかにもして幸ひあらせⓑたく思ひて、男山八幡宮へあひ伴ひつつ参りけり。過ぎし年ごろならば、、車にも乗るべかりⓒしかども、わびしく衰へたることなれば、②二人徒歩にてぞ参りける。母は㋐夜もすがらを奉りて、娘のことを申しけり。娘は何心もなく寝入りたり。母、㋑おどろかして言ふやう、「う疾うとかく参詣して祈誓するも、がためぞ。親の思ふほど、身のことは思はⓓぬにや」とうち口説きⓔければ、娘とりあへず、

　身の憂さをなかなかなにといはしみづ思ふ心は神ぞ知るらむ

と③うちながめたりければ、母は、「日ごろは歌など詠むとも知らず。思ふままに寝入りⓕたることをうらめしく思ひⓖつるに、かやうの心にてありⓗけるよ」と思ふにつけても、④いよいよいとをかしかりけり。

語注

男山八幡宮＝の旧称で、現在の京都府八幡市にある。

法施＝神仏に経を読み、法文を唱えること。

祈誓＝神仏に対しての祈り、誓い。

【原文】

都にわびしき女房侍りけり。かなしく思ふ娘一人持ち給へり。いかなる人にも見せたくは思ひしかども、しかるべきたよりもなかりけり。せめてこの女子をいかにもして幸ひあらせたく思ひて、男山八幡宮へあひ伴ひつつ参りけり。過ぎし年ごろならば、、車にも乗るべかりしかども、わびしく衰へたることなれば、二人徒歩にてぞ参りける。母は夜もすがらを奉りて、娘のことを申しけり。娘は何心もなく寝入りたり。母、おどろかして言ふやう、「う疾うとかく参詣して祈誓するも、がためぞ。親の思ふほど、身のことは思はぬにや」とうち口説きければ、娘とりあへず、

　身の憂さをなかなかなにといはしみづ思ふ心は神ぞ知るらむ

とうちながめたりければ、母は、「日ごろは歌など詠むとも知らず。思ふままに寝入りたることをうらめしく思ひつるに、かやうの心にてありけるよ」と思ふにつけても、いよいよいとをかしかりけり。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

都に貧しい〔　　　　〕がいた。〔　　　　〕の良縁を願い、二人で〔　　　　　　　〕に参詣したが、〔　　　　〕は眠ってしまった。〔　　　　〕がそのことを責めると、〔　　　　〕は自分の思いを〔　　　〕にして母に伝えた。

問二　波線部㋐・㋑の意味を答えよ。（㋑は終止形でよい。）〈4点×2〉

㋐〔　　　　　　　　　　〕　㋑〔　　　　　　　　　　〕

問三　二重線部ⓐ～ⓗの文法的意味を答えよ。〈1点×8〉

ⓐ〔　　　　　〕　ⓑ〔　　　　　〕　ⓒ〔　　　　　〕　ⓓ〔　　　　　〕

ⓔ〔　　　　　〕　ⓕ〔　　　　　〕　ⓖ〔　　　　　〕　ⓗ〔　　　　　〕

問四　傍線部①・③を現代語訳せよ。〈5点×2〉

①〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

③〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問五　傍線部②とあるが、なぜ「徒歩」で行ったのか。三十字以内で答えよ。〈8点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問六　「身の憂さを…」の和歌の説明として最も適当なものを選べ。〈8点〉

ア　自分よりも母親の行く末の方が心配であるのを、神様はわかっていないということを、縁語を用いて詠んでいる。

イ　一人でいる自分のつらさは、神様だけがわかっているということを、序詞を用いて詠んでいる。

ウ　わが身のつらさは口に出しづらいが、神様はよくわかっているということを、掛詞を用いて詠んでいる。

エ　わが身のつらさをあえて言わない方が、神様は自分に御利益を与えてくれるだろうということを、折句を用いて詠んでいる。

〔　　　〕

問七　傍線部④とあるが、女房がこのように思った理由として最も適当なものを選べ。〈8点〉

ア　いつもは思うままにふるまう娘が、今は思いどおりにならずにつらいという歌を切々と歌い上げたから。

イ　ただ寝ているだけだと思っていた娘が、黙ったままでも熱心に祈りを捧げていたことを歌によって知ったから。

ウ　普段は歌などは詠まない娘が、歌に託して、初めて母親である自分に対する優しい気持ちを伝えたから。

エ　何も考えずに寝ていると思っていた娘が、自分のに対して、つらい思いを込めた歌を即座に詠んで返したから。

〔　　　〕

【解答】

問一　女房　女子　男山八幡宮　女子　女房　女子　歌

問二　㋐＝夜通し・一晩中　㋑＝起こす〈4点×2〉

問三　ⓐ＝完了（存続）　ⓑ＝願望（希望）　ⓒ＝過去　ⓓ＝打消　ⓔ＝過去

ⓕ＝存続（完了）　ⓖ＝完了　ⓗ＝詠嘆　〈1点×8〉

問四　①＝どんな人にでも結婚させたく思ったけれども、〈5点×2〉

　　　③＝詠んだところ、

問五　落ちぶれてしまい、輿や車に乗ることもできなくなったから。（28字）〈8点〉

問六　ウ〈8点〉

問七　エ〈8点〉

【現代語訳】

都に貧しい女房がおりました。（女房が）かわいく思う娘一人を持ちなさった。どんな人にでも結婚させたく思ったけれども、ふさわしい縁もなかった。熱心にこの女の子をどうにかして幸せにさせたいと（女房は）思って、男山八幡宮へ（娘を）伴って参詣した。以前であるならば、輿や、車にも乗るはずであったが、貧しく（家が）衰えたことであるので、二人徒歩で参詣した。母は一晩中読経を差し上げて、娘のことを祈り、誓い申し上げた。娘は無心に寝入ってしまった。母が、起こして言うことには、「早く早くこのように参詣してお祈りすることも、誰のためか。親が思うほど、（娘は）自分の身のことは思わないのか」と説教したところ、娘はすぐに、

わが身のつらさをかえってどのように言うべきでしょうか。口に出して言うのは難しいですが、言わなくても、その気持ちは神様が知っているでしょう。

と詠んだところ、母は、「いつもは歌などを詠むとも知らない。思うままに寝入っていることを恨めしく思ったが、（娘は）このような気持ちでいたことよ」と思うにつけても、ますます本当に感じ入った。

【補充問題】

問１　「男山八幡宮へ～参りけり」（２～３行目）とあるが、「女房」はなぜこのようにしたのか。二十字以内で答えよ。

問２　「日ごろは歌など詠むとも知らず」（８行目）を現代語訳せよ。

問３　「かやうの心」（９行目）とはどのような心か。答えよ。

問４　本文の内容に合致するものを一つ選べ。

ア　女房は貧しかったので、娘を豊かな人に嫁がせて楽に生活したいと考えた。

イ　落ちぶれていた女房であったが、以前は輿や車に乗るようなそれなりの身分だった。

ウ　女房は娘とともに一晩中八幡に祈り続けたが、途中で疲れて眠ってしまった。

エ　娘は日ごろから歌を詠んでいたので、女房は娘の歌を聞いても驚かなかった。

【補充問題解答】

問１　娘を何とかして結婚させたいと思ったから。（20字）

問２　いつもは歌などを詠むとも知らない

問３　娘が、結婚できずに母親に迷惑をかけていることをつらく思う心。

問４　イ